



線路が紡ぐ物語

鉄道記念物・準鉄道記念物の18史

写真・文＝原田伸一

鉄道記念物は、歴史ある鉄道財産を後世に残すために日本国有鉄道が1958年に設けた制度である。JR北海道ではこれを引き継ぎ、2010年北海道鉄道130周年を機に新たな指定を加え、記念物は4点に準記念物は14点となった。いずれも北海道の鉄道発展に功績があった動力車や施設ばかり。それらが登場した時代背景をたどりながら、果たした役割などを紹介する。

第12回 【小樽駅本屋（準鉄道記念物第10号）他】



改装工事前の小樽駅本屋。間もなくレトロ調の建物に復元される

小樽駅本屋は二〇一二年（平成二十四）春、耐震補強を兼ねた大規模な改装工事が完成する。「本屋」とは改札口や待合室を備えた建屋部分で、工事中、内部の鉄骨代わりに古レールを使っていたことが判明するなど話題を呼んだ。安藤昭彦駅長は「外観、内部とも昭和レトロの味を色濃く演出できる」と期待する。

一八八〇年（明治十三）、北海道の鉄道が開業して以来、小樽は札幌と隣り合わせて発展を遂げた。駅本屋は一九三四年（昭和九）の完成で、当時の上野駅をモデルに作られた。正面から見ると左右対称、庇が大きく突き出ているのが特徴だ。国の登録有形文化財でもある。函館本線の電化と非電化の分岐点のため、札幌方面は大半が高速電車だが、反対側の余市、



堂々かつ優雅な趣の旧室蘭駅舎。発着する列車はなくても市民に親しまれている

が、反対側の余市、倶知安方面は小編成の気動車が主役。リゾート地として人気のニセコ方面への観光客も多い。忙しさとゆったり感が同居する駅だ。4番ホームには幼時に小樽に住んでいた俳優の故石原裕次郎の写真パネルが置かれ、「裕次郎ホーム」と名づけられている。もう一つは準鉄道記念物第11号の旧室蘭駅舎。室蘭は一八九七年（明治三十）、岩見沢からの線路が到達したのを機に、石炭の積出港として繁栄の道を開いたが、この駅舎は一九一二年（同四十五）に作られ、現存する道内最古の木造建築駅

舎。鉄鋼産業が発達した、鉄の街“の象徴的存在”だった。札幌の時計台と同じく、屋根面が四方に傾斜する寄せ棟づくりで、白壁など明治建築の粋を今に伝えている。これも国の登録有形文化財。

SLブームが最高潮に達した七五年（昭和五十）十二月十四日、C57形135が牽引する国鉄最後のSL旅客列車が、この駅から岩見沢に向けて出発。消え行く雄姿を記録しようとして全国からファンが集まり、脚光を浴びた。九七年（平成九）、おしゃれな雰囲気

の現駅舎に引継ぎし、今は室蘭観光協会の観光インフォメーションセンターとして活用されている。内部には開業時の繁栄振りや長大な石炭列車の写真が展示されているほか、ご当地グルメのカレーラーメンや室蘭やきとり（豚肉とタマネギに洋辛子をつけて食べる）の紹介コーナーもあり、街の歴史と観光の発信基地として二度目の役割を果たしている。